

## Ⅲ. 結 び

### 第 7 章 まとめと今後の展望

本論文では、フィールドワークで収集したデータを用いて、マテング語の総括的な記述を行ってきた。この言語のように文献がほとんどない言語についての研究では、できるだけ多くの現象について触れることが有益である。また、言語そのものだけでなく、社会言語学的背景を分析することは、その言語を知る上で極めて重要であると思われる。しかしながら、これまでのバンツー諸語の研究を見ると、全体像が十分に示されていると言える記述研究は決して多くない。特に、対象となる言語を社会言語学と文法の両面から記述している研究は、ほとんど見られない。本論文はこれまで記述されることがなかったマテング語の全体像を明らかにすることを目指し、歴史的背景や社会言語学的背景をも含めて、網羅的に述べてきた。このような網羅的な記述研究は、一言語の研究にとどまらず、これまで少なかったタンザニア南部の言語資料として、バンツー諸語の比較研究、あるいは諸理論の研究に貢献するものであると考える。

最終章にあたり、これまで述べてきたことを章ごとにまとめ、今後の展望を述べる。

#### 7.1. 各章のまとめ

##### <序篇：第 1 章，第 2 章>

序篇では、本論文の目的を述べ、マテング語に関する先行研究、社会言語学的状況、調査の背景、などについて説明した。

マテング語に関する先行研究は、今世紀初頭に出版されたドイツ人宣教師による語彙集と、1983年にロンドン大学に提出されたマテング人の言語学研究者による借用語に関する博士論文などがあるだけで、文法を体系的に記述したものは全くない。

マテング語の調査を進めていくと、この言語が、文法的にも語彙的にもスワヒリ語から多大な影響を受けていることが見えてくる。そのような状況にあるマテング語を理解するためには、現在この言語が置かれている社会言語学的状況を明らかにすることが不可欠である。そこで、マテング語の言語状況を米田（1995）のデータから明らかにするとともに、

そのような状況を導き出したタンザニアの言語政策について考察を行なった。

## <本篇：マテング語の文法>

### 第3章 音韻

マテング語の母音と子音は以下のとおりである。

#### 母音

i		u	i:	u:
e	o	e:	o:	
ɛ	ɔ	ɛ:	ɔ:	
a		a:		

母音は7音に対して、それぞれ長短の対立がある。舌の高さによって母音調和を起こす。

#### 子音

		両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	(vl)	p	t		k	
	(vd)	b			g	
摩擦音	(vl)		s			h
破擦音	(vd)			dʒ		
側面接近音			l			
鼻音		m	n	ɲ	ŋ	
半母音		w		j		

/l/ と /dʒ/ は、体系的にはそれぞれ /d/ と /dz/ に位置するものであると考えられる。これらが /n/ に先行される場合には、異音 [d], [dz] で現われる。

音節は開音節で、V, N, (N)C(S)V と構成される。この言語では音節とは別に「モーラ」という単位を考える必要がある。長母音をもつ音節は2モーラで、それ以外の音節は1モーラである。マテング語には音素としての長母音があるが、それ以外に、①次末音節の母音、②CSに続く母音、③NCに後続される母音、は長母音化する。つまり、これらは2モーラで現われる。ただし、接辞が付加されることによって長母音が語末から3音節めよりも前に位置することになった場合には、それが長母音化した母音であっても音素としての長母音であっても、短母音化して1モーラで現われる。

マテング語には声調の対立がある。HとLの対立が聞かれるが、これは声調素としてHとLがあるというよりはむしろ、Hのみが指定されていて、指定のないものがすべてLで現われていると考えられる。この言語では、声調は音節単位ではなく、モーラ単位で配列される。

#### 第4章 名詞と連体修飾語についての形態論的記述

名詞は19の名詞クラスに分れている。名詞クラスは、マテング語全体の文法呼応システムの基盤となるものである。各クラスには独自の名詞クラス接頭辞があり、名詞は「名詞クラス接頭辞一名詞語幹」という構造から成る。ただし名詞クラス接頭辞の中には、場所クラスのように、別の名詞クラス接頭辞の上から付加される「二次的クラス」の接頭辞がある。その場合には名詞語幹に名詞クラス接頭辞が2つつくことになる。

それぞれの名詞クラスには、かつては意味的な共通点があったとも考えられる。しかしながら、現在ではほとんどのクラスに関して、その特定は困難である。

名詞語幹には声調の対立があり、基底声調は5つのグループに分けられる。名詞の声調は、接頭辞と語幹の声調が合わさり、そこに規則が適用されて表層化する。接頭辞の声調、語幹の声調、適用される規則は以下のようにまとめられる。

##### 名詞クラス接頭辞の基底声調

5クラスと場所クラスの接頭辞	: L
5クラスと場所クラス以外の接頭辞	: H

##### 各声調クラスの名詞語幹の基底声調

声調グループⅠ	: すべてL
声調グループⅡ	: 語幹の直前がH (語幹自体はすべてL)
声調グループⅢ	: 語幹頭がH
声調グループⅣ	: 語幹頭の右隣がH
声調グループⅤ	: 語幹末がH

##### 規則

- (1) Hが重なった場合、前のHは消える
- (2) 末尾のHは左隣のモーラにずれて現われる
- (3) 孤立形で語中にHが全くない場合には、語頭から2つめのモーラがHになる。ただし、3音節の名詞の場合には語頭がHになる

名詞と同様に単独で主語や目的語として立つことができるものに独立代名詞がある。独立代名詞の構造は「代名詞接頭辞－語幹」で、代名詞接頭辞は、指示する名詞が属している名詞クラスに呼応する。代名詞接頭辞の声調には5クラスとそれ以外のクラスの差はなく、すべてLである。

連体修飾語は被修飾語名詞が属する名詞クラスに呼応した接頭辞をとる。その接頭辞として、名詞クラス接頭辞が付くものと代名詞接頭辞が付くものがある。連体修飾語の種類と、それらにつけられる接頭辞は以下のとおりである。

- 名詞クラス接頭辞が付くもの      : 形容詞
- 代名詞接頭辞が付くもの         : 所有形容詞, 属辞, 数量形容詞, 指示形容詞

これら連体修飾語は、被修飾名詞の後ろに位置する。

## 第5章 動詞についての形態論的記述

他のバンツー諸語と同様に、動詞構造の理解はマテング語文法の要であり、これは本論文の中心とも言える章である。

動詞は次のように構成される。

主語辞	－	時制辞	－	目的語辞	－	語根	－	拡大辞	－	派生辞	－	前語尾辞	－	語尾
dʒu	-	á	-	gu	-	but	-	uk	-	il	-	φ	-	a
<3sg>		<未来形>		<2sg>		「走る」		<適用形>		<基本形>				

「彼は君を追いかける（確認未来形）」

上記の構成要素は役割によって3つに分けられる。

- |               |     |               |
|---------------|-----|---------------|
| ①文法呼応要素       | ・・・ | 主語辞, 目的語辞     |
| ②動詞の意味を決定する要素 | ・・・ | 語根, 拡大辞, 派生辞  |
| ③活用要素         | ・・・ | 時制辞, 前語尾辞, 語尾 |

①の文法呼応を示す主語辞（S辞）と目的語辞（O辞）は、それぞれ、主語名詞と目的語名詞が属している名詞クラスに呼応して動詞に付加される接辞である。これらは文法呼応を示すだけでなく、主語名詞や目的語名詞が明示されていない場合には、代名詞として

の機能をする。②の意味を決定する要素のうち、語根と拡大辞は動詞の基本的意味を表わす。機能的にはこれらは分割できない要素である。派生辞は、語根と拡大辞が示す動詞の基本的意味に、ある一定の意味を付与する機能をもつ。③の活用要素は、それらの組み合わせによって、動詞のテンス・アスペクト・ムードを表わす。

動詞語根は声調の対立を失っており、すべての語根がHを有する。動詞の構成要素のうち、語根以外に固有の声調を有するのは時制辞と語尾である。語根、時制辞、語尾以外の構成要素には固有の声調はなく、現われる声調は環境によって決定される。直説法に用いられる時制辞と語尾の種類、それぞれの声調は以下のとおりである。

時制辞：	過去	-a-	(L)
	未来	-í-	(H)
	移動	-aká-	(L H)
語尾：	完了過去	-iti	(L L)
	完了現在	-ití	(L H)
	非完了当日	-ádʒe	(H L)
	非完了非当日	-adʒe	(L L)
	基本語尾	-a	(L)

動詞の声調は、モーラ数が決定された後、各モーラに配分され、そこに規則が適用されて表層化する。その規則には、活用形に由来するもの、音韻に関するものがある。音韻に関する規則は以下のようなものである。

- (1) 語尾にHがない場合は、語根のHが右隣のモーラに拡張する。
- (2) 時制辞の右隣の要素は、時制辞と逆の声調で現われる。
- (3) Hが3つ現われると、真ん中のHは消える。
- (4) 末尾のHは左隣のモーラにずれて現われる。ただし、ずれることでそれが元々あったHと連続してしまう場合は、Hは左隣にずれることなくキャンセルされる。
- (5) Hが全くない場合には前から2つめのモーラがHになる。

## 第6章 文の構造と種類

マテング語の基本的な語順は、「主語 + 動詞 + 目的語」である。主語名詞、目的語名詞を修飾する語は、常に、被修飾語の後ろに位置する。副詞をはじめとする文修飾語は、

文頭あるいは文末に位置する。

他の章で例文として用いたものの多くは、一般動詞を用いた単文の述語動詞文であったが、それ以外の文の種類として、be 動詞文、否定文、疑問文、依頼・命令文などがある。これらの文の構造と用法について述べた。

複文は、構成している節の相互関係から「主従複文」と「並列複文」に分けられる。活用形の中には主従複文でしか用いられないものが僅かにあるが、それ以外は単文で用いられるものと同じである。節の構造も、基本的には主節と従属節の間に違いはない。

以上が、各章で扱ってきた事柄である。それぞれの事柄の、主に構造と用法について、分析を加えながら述べてきた。音韻論、形態論、統語論、という一応の枠を設けたが、膠着性が極めて高いというバンツー諸語の性質上、それらの境界が曖昧にならざるを得なかったところもある。

## 7.2. 今後の展望

マテング語を網羅的に扱うことを目指してきたが、未解決の問題や、本論文で扱えなかった事柄など、課題もたくさん残されている。今後は、それらの課題を踏まえてさらに研究を進めていくわけであるが、その主な展開として、①個別テーマの研究、②周辺言語と方言の研究、を考えている。以下具体的に述べる。

### 7.2.1. 個別テーマの研究

本論文ではより多くの現象について記述することを目指したため、個別テーマを深く追求することができなかった部分もある。先に述べたとおり、本論文は「記述研究」という独立した研究であると同時に、別の研究に展開させていくための基盤でもある。様々な現象について記述したが、それらひとつひとつが、さらに独立したテーマとして追求されるべきものである。

例えば、そのひとつとして動詞の適用形があげられる。他の派生形については、用法をまとめ、派生辞がもつ意味的機能を明らかにしたが、適用形は用法が複雑であり、本論文ではその多種にわたる用法を類別して示すに止まった。バンツー諸語の適用形の研究は、これまでも数多く発表されている。それらの研究のほとんどは構造に焦点をあて、用法の違いを構造の違いによるものとして説明している。しかしながら筆者は、少なくともマテング語に関しては、それらの研究が考慮していない動詞本来の意味、あるいは主語や適用目的語の属性こそが、適用形の「多様な用法」を生じさせる最も大きな要因であると考え。先行研究に対するさらなる検討を含め、適用形に関する研究を追求していくつもりである。

他の個別テーマの例としては、声調の問題があげられる。本論文では、名詞については語根の基底声調によって5つの声調グループに分け、それぞれの特徴を示した。また動詞については、活用形の声調を概観することで、各要素の声調と活用形の声調パターンを解明した。これらのことでマテング語の声調システムの概要を示すことはできたが、表層声調の決定については必ずしも満足のいく方法で提示できなかったところもある。周辺言語やバンツー祖語の声調と比較しつつ、未解決の問題の解決も含め、今後の個別テーマとして展開させていく。

### 7.2.2. 周辺言語と方言の研究

本論文執筆のためのフィールドワークでは、周辺言語のデータはほとんど収集できていない。マテング語が他言語から受けている影響についても、スワヒリ語からの影響を捉えただけで、周辺言語からの影響は明らかになっていない。言語の変容や相互の影響関係を

調べるためにも、周辺言語の調査と比較研究が必要であろう。とりわけ、歴史的に見てマテング語とかなり近い関係にあると考えられるンデンデウレ語の調査は必須であろう。マテング人とンデンデウレ人が、ンゴニ人による侵攻を受ける前には居住地や言語を共有していたという歴史(2.1.2.参照)を考えると、マテング語とンデンデウレ語が別々の言語として確立してから、まだ150年ほどしか経っていないということになる。

また、マテング語の地域方言の調査も今後の課題である。これまでの調査では、本論文の主なデータであるリテンゴ方言と音韻的に顕著な違いが見られたンパパ方言の語彙調査を行なっただけであるが、マテング人という民族グループが、元来広い範囲に分れて暮らしていたという背景から考えれば、当然、他にも多くのバリエーションが存在していると考えられる。